

Title	『すゑひろ物語』 解題・ 翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1995
Jtitle	三田國文 No.22 (1995. 6) ,p.35- 40
JaLC DOI	10.14991/002.19950600-0035
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19950600-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『すゑひろ物語』解題・翻刻

石川 透

解題

『すゑひろ物語』は、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』・一九八二年)に、同系統の三本の絵巻が掲載されている。そのうち、翻刻されているのは、赤木文庫旧蔵の一本にすぎない。今回翻刻するのは、絵は取られているものの、元は絵の入った巻物である。系統的には、「簡明目録」掲載の三本とほぼ同じであるが、小異もある。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、架蔵

形態、巻物、一軸

時代、「江戸前期」写

寸法、縦三二・七釐

表紙、後補菊花模様布目表紙

外題、ナシ

内題、ナシ

料紙、下絵入り鳥の子紙

字高、二六・五釐

印記、ナシ

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので(ママ)は記さなかった。

すゑひろ物語(仮題)

つたへきく、もろこしの、岷江^{みんかう}の、みなもとを、尋ぬれば、流れの水、わつかに、さかつきを、うかふかなほと、の、浅瀬^{あさせ}なれとも、そのすゑに、をよんては、大なる江となり、底^{そこ}ふかく、波たかふして、もし、風すこしあらければ、舟をいたし、わたる事、かなひかたしとかや。

松子^{しょうし}の一粒は、そのかたち、小^{ちひ}けれとも、地におちて、生長^{ちやう}すれば、根はひこり、枝しげり、四方にたれしきて、すゑなく、その大木となる時には、山にひろこり、谷にふさがり、木すゑは、蒼天^{そうてん}の雲をしのき、風のひゞき、とをくつたえて、いく千丈とも、しりかたし。

山は、ちり泥^りの、かさなり積^{つみ}におこり、海は、こけの露、し

たゞりあつまるに、なれりと云事、是みな、こうをかさね、としをつもりて、やうやく、小より大にいたり、あさきよりふかきにをよべり。

鶴の卵の、わつかなる日をかさねて、雛となる。つばさ、すでに、そなはる時は、雲漢の空に、羽うち、鳴こゑ、九かうにきこえ、とぶに、追事あたはず、とゞむるに、いくるみの及ふところにあらす。

小蛇、始め、つま櫛のこつくなれとも、とし久しくつもりぬれは、その身、大に、うろこかさなり、地にわたかまりては、山のこつく、時いたりて、龍となり、いきほひにのりては、雲をおとし、雨をくたし、九天にのぼるにをよひて、飛行自在を得て、日の光をおほふ。

物みな、時をうれは、すゑひろこりて、いきほひあり。後にさかへて、めてたきためし、しなく、まことに是おほし。かの黄楊木の、一とせに、わつかに一寸を長して、閨の有としは、また、一寸しゞまるといふ。かゝるたぐひは、物のはしめには、見きくたに心うし。人のつとむる学のみちも、黄楊木にならふ事なかれとこそ、いましめられけれ。

〔絵・第一図・欠〕

されは、世の人の、としのはしめを、祝ふにも、数くめてたき、ためしとて、物によせ、名によそへて、よはひをのべ、命をのぶ。君かよはひは、いつまでも、かはらてくめる、わか水や、又、春日野の、雪まをわけ、出てつむらん、はつわかな、ねのみの小松、引うへて、千とせの春の、初めとて、色もときは、の、わかみとり、枝にはすたつ、ひな鶴の、すむといふなる、

ほうらいの、山の岩ねは、うこきなき、国ゆたかなる、ためしとかや。

かすもしられぬ、君か代の、久しきかけを、千尋ある、竹のそのふの、すゑかけて、ななき契りは、玉椿、千世に八千代に、いつまでも、たえすむすへる、柳の糸、くり返してや、さほ姫の、おりてさらせる、朝ことの、霞の衣、うす氷、とくる御池に、ある亀の、万代かけて、かきりなき、浜のまさこの、数く、に、めぐる玉の、さかつきに、かけをたゞへて、くむ酒の、薬となりて、君か代を、たもつよはひは、久かたの、あまつ御そらと、あらかねの、つちと草木の、あらんかきり、つきすましき、そのためしに、めてたき事を、いわふなり。

ト部のなにがしが、神前に、申せし祝詞にも、よはひは、松と竹、ことぶきは、鶴と亀、ゑびのこし、かごふて、鱒のますく、に、銭はつなきながら、綿はたばねながら、鯛のたいらかに、家さかへましますと、よみたてまつり、きねん申せし事も、人の世の中、物みな、あやかる事、なきにあらず。よき事には、あやかるへし。麻の中の多もきは、あさにあやかりて、麻のことし。

〔絵・第二図・欠〕

しかるに、今の世にも、すゑひろがりとして、めてたき名によそへつゝ、いはふへき所には、ゆく人も、これをもち、又、たてまつる事もあり。

此日本に、つくりいたし、もてはやす。そのたくみ、地紙は、これ半月なり。ほねの数、十二本を、十二月にたとふたり。二つのかなめは、日月をあらはせり。

ひらく時には、風涼しく、なつのあつさを、わするへし。立て舞をまふ時は、是やむかしの神あそひ、天つ空なるをとめの袖、さなから、こゝに、うつすとかや。たゝめは、又、すゑひろく、礼をたすくるとり物なり。

うこくに風を生すれば、人のあつさをとゝむるは、これ、仁の徳なり。かなめのかたくもちて、ほねのみだるゝ事なきは、すなはち、義をまもるなり。

節会いはひの折からに、しやうぞくを引つくるひ、又は、貴人の御前には、かならず、もちてしこうする、これ、礼の徳なり。

ひらけは、ひらき、たゝめは、たゝむ、開合、こゝろのまゝなるは、これ、智の徳にあらずや。あふけば、かならず風を生ず、此事、さらにたかはさはるは、是、信の徳なり。

いくさにむかふて、敵をまねき、せうぶのしるしをあらはすは、是、武勇の徳ならずや。

五常の道たゞしく、智仁勇の三徳、たゞ、此ひとつの扇にそなふ。

むかし、丹波の国、さえきの郡に、佐伯宿禰豊麿と云ものあり。生れてよりこのかた、その心、つねにさはがしきをきらひ、しづかなる所をこのみ、折くは、山に入て、笙をふきて、心をたのしみけり。

されは、そのこゑ、呂律にかなひけるにや、みねの猿は、木のみをもとめて、これをさゝげ、岩かげにかくれすむ、さをしたかのたぐひ、むじな、うさぎにいたるまで、したしみなれて、あつまりきく。諸鳥などは、木すゑにとゞまりて、これを聞けり。

まことに、もろこしの伯牙と云もの、琴をひきしには、水にすむうろくす、おとり、鄒燕と云もの、笙を吹しには、寒谷あたゝかに、春のことくありければ、また冬ながら、梅桜の色をあらそふ花咲けり。それは、もろこし、いにしへのためし、これは、我てうの豊丸、音律に達せしゆへそかし。

〔絵・第三図・欠〕

かくて、豊麿、日ごとに山に入、笙を吹て、たのしみとす。をのつから、仙境の道にいたり、身もかろく、こゝろもすみわたる。いよく山をこのみて、さらに、人里をは、すみうきものに、おもひけるほとに、この心さしにひかれて、なを、山ふかく、わけ入たりければ、ひとつの園に、行いたりぬ。

園のなみ木をみわたせば、春のけしきそ、のとなる。霞の衣たちわたり、谷の鶯のさちかく、梅がさえたにつたひては、さえつるこゑも聞ゆなり。池の水もとけそめて、岸の柳の糸たれて、松にかゝれるむらさきの、藤もや春の名こりとて、かこちかほにも花咲らん。

井出の山吹色ふかく、みなみにつゝ夏の空、たていし、やり水なかれては、落くる瀧の音をそへ、みきはにさけるかきつはた、御階のもととせうびの花、ほころびそめて匂ふらん。垣ねにしろくみえわたる、卵の花のよそほひは、月か雪かとあやまたる。雲井に名のるほとゝきす、あやめみたるゝぬまの水、こめてふりそふ五月雨に、昔を忍ふ花橘、匂ひやねやにかよふらん。さはべの蛍みたれては、なにもおもひに身をこがし、さえぬ火をもやうらむらん。松にたかく鳴蟬の、いのちを露にかけながら、もぬけてゆくも心あり。

西より秋の風おちて、露おきそふる萩かはな、契りはくちじをみなへし、なにをうらみにくねるらん。まがきに菊の花咲て、まどのもみち葉うすくこく、染る時雨の音すこく、妻とふ鹿のこゑく、虫のうらみもたえく、よはりゆくこそあはれなれ。

木すゑに冬の色みえて、北よりさそふ嵐の音、木の葉やつれてふる時雨、こととふみちをうつみつ、枯野のすゑ霜さえて、雪のしたなる谷河も、いとたえく声むせひ、峰ふく嵐はけしきに、羽かひをかはす鴨鳥の、をしねの夢やさますらん。かけひの水もつらゝみて、さひしき空によこをるゝ、炭かまのけふりのすゑ、げに冬なれやとこゝろほそし。

猶ふかくたちいりて、あるしのすみかを、さしのそけば、柴の戸ほそ、竹の垣、さもあやしけに、みえけるが、内には、年のころ、七十はかりの、おきなのの二人、さしむかふて、心しづかに、くすりのしなく、とゝのへて、こがねのかまにて、ねるとみえし、豊磨を見つけて、「いかに、あれは、何のゆへにか、爰にはきたれるぞ」ととふ。

豊磨、こたへていふやう、「われは、たんぼの国、さえきのこほりのものなるが、世のさはがしきをきらひて、しづかなる所をこのみ、是まで、さまよひ来り侍へり。爰は、聞ゆる仙境とおほえたり。ねがはくは、それがしにも、仙術をさづけたまへ」と申けり。

おきな、うち聞て、「さらば、こなたへ、きたるへし」とて、内にいぎなひ入つゝ、まづ、一りうのくすりをあたへ侍へり。豊磨、是をぶくするに、そのあちはひ、心もことばもをよは

れす。心のうち、たちまちに、すゞやかにおほえて、とびたつはかりに成にけり。

おきな、申されけるやうは、「仙家の道術さまくも也。いまは、なんちにつたふへし。この法をたまちぬれば、まづ、地仙となるへし。それより、徳をほどこし、ますく道をこなへは、つゐに、天仙と成へきなり。とくく故郷にかへりて、人をめくみ、徳をおさめ、身をつつしみ、こゝろをとゝのへ、天せんとなり給へ」とて、鋒雪玄霜の練丹、長生のくすりを、五色のつばにうつしいれ、とよ丸をまねき、あたへて、谷のほとりにをくり出れば、あとは、すなはち、雲霞、けふりの色に、うつもれて、仙家の四季のよそほひは、へだゝりて、みえさりけり。をくりて出し、おきなも、雲ちをかけりて、帰りにけり。

〔絵・第四図・欠〕

さる程に、豊磨は、故郷にかへり、妻子けんそくを、よひあつめて、かたりけるは、「我、すてに、仙家にいたり、まのあたり、長生の道をうけて、地仙の数にくはゝり侍へり。汝等も、これをつたへて、我家をおこすへし」とて、さまくの方術を、ほどこし、おしへたり。

又、とよ丸、ある日、山中にいりて、心をすまし、筆をふく所に、かしこに、ひとつの洞ありて、朝な夕な、雲をおこす。しかるに、このほら、そのふかき事、ほとりなし。豊磨、洞ちかく、岩の上に座をしめ、筆をふく。そのこゑ、雲にひゞき、地にみつれば、山中の鳥けだもの、ことくあつまりて、耳をかたふけ、つばさをたれ、かうべをうなたれ、ひつめをおり、これをきくこそ、きどくなれ。

かゝりしまゝに、ほらのうちに、としへにけりとおほえて、色しろき蝙蝠かろうり、数をしらす、飛きたり。仙家せんかの書を案するに、蝙蝠かろうり、生れて、千ざいをすくれは、その色、へんじて、白し。これをとりにて、食すれば、長生ちやうせいの身となる。その大さ、鵲かきさぎのことく、此書の内にしるしたる、こと葉にたがはす、大さ、鵲かきさぎのことく、その色、白きかうもり、数千百とび出て、木にとゞまり、岩かどにかゝりて、つばさをのべ、または、たゝみて、笙しやうをきくとおほえたり。

豊麿とよまろ、つゝ／＼これを見るに、心つく事あり。公卿くぎやう、殿上人でんじやう、真の束帯そくたいし給ふには、笏しやくをとりて、礼をおこなふ。又、地下のともからも、これをとりにて、礼をたすく。

もろこしの、眞舜ましゆんのつくりたまへる、五明の扇子せんしを、もろこし人は、手にもちて、公卿くぎやう臣下のその外は、笏しやくにかへて、是をとれり。又、団扇だんせんのうちわといふは、是さらに、礼の道に、そなへたりとも、かなひかたし。

わかつて、また、たくみなからんや。かたちを五明によせ、たくみを、このかうもりの、つばさによせて、笏しやくにかへて、礼のうつはものに、そなへんと、すゑひろがりのあふぎを、このとき、たくみ出しけり。

そのときのみかどは、天智天皇とそ申けり。たんばの朝倉あさくらの宮に、木のまろ殿をたてられ、爰に、すませ給ひけり。されは、天皇の御歌に、

朝くらや木のまるとのに我すめは

名のりをしつゝゆくはたか子そ

と、詠せさせ給ふ。

豊麿とよまろ、すゑひろの扇あふぎを、たくみいたして、子細しさいをつぶさに、そうもんして、扇をさゝげたてまつる。

みかど、ゑいかんのあまりに、豊麿を、新中納言に、補せられけれども、もとより、世中のさはかしきをいとて、身は山すみの人となり、長生の道をおこなふ故に、官位くわんゐを辞退して、地仙ぢせんとなり侍へりつゝ、石髓せきずいをとり、雲母うんぼをくらひ、つゝに、天仙の道をさとり、空をかけり、雲をわけ、飛行自在ひやうじざいをほとこし、妻子さいしに、もろ／＼の薬方やくほうをつたへつゝ、みづから、仙宮せんきうにいりにけり。

〔絵・第五図・欠〕

さるほとに、豊丸とよまるか子、すなはち、さえきのこほりを給はり、父かたくみをえいかんあり、その名を、すぐにつけられて、さえきの中将季広すゑひろとぞ、くたされける。

仙術せんじゆつをぢきにつたへ、長生ちやうせいふしの薬をねりて、みかどに、これを奉りければ、君、きこしめさるゝに、御よはひ、わかやかに、ぎよくたい、ちから、すくやかに、おはしますこそ、めてたけれ。

みかど、ゑいかん、あさからす、中将をめされて、施薬院せやくいんにおかせ給ひ、典薬てんやくの頭になされたり。和氣わけ、たん波たんぱ、二流にりゆうのうち、丹波たんぱ氏の典薬は、この時よりはじまれり。

すゑひろは、子とも、あまた出きて、くらゐをすゝみ、官にいたり、諸国にひろがり、名をあらはし、君をしめし奉る。

これより、諸国にひろりて、すゑひろの扇とて、仙家せんかのたぐみ、いはれありて、此あふぎの徳たかく、よはひをのぶる、松のかせ、あふげば、こゝも仙境せんきやうの、すみかに、かはる事も

なし。おさむる手には、礼をとゝのへ、じゆふくのふたつを、こめたれば、すゑひろかりて、いつまでも、さかえ久しき扇とかや。

もとより、年をつみ、こうをかさねて、さかえさかふる、そのためしは、鳥けだもの、草や木に、ためしなきにはあらねとも、この扇の一徳には、くらべてすぐる事そなき。手にとるからに、すゞしむる、神の心も舞姫の、袖かへすにや、いさむらん。あふけば内より吹いたす、風ものとかに四方の海、波しつかなる松かえも、ならさぬ御代のしるしとて、いはふ心のすゑひろき、君のめくみは久かたの、月の都のもてあそび、扇合せのたはふれも、たゝすゑひろの徳とかや。

されは、あふぎのかたちを、めに見るからに、めてたくも、あやからせおはしまして、すゑひろがりて、いつまでも、つきせぬためし、今こゝに、君か御代にてしられたり。